

外為短観レビュー 豪ドル人気の凋落と相場への影響

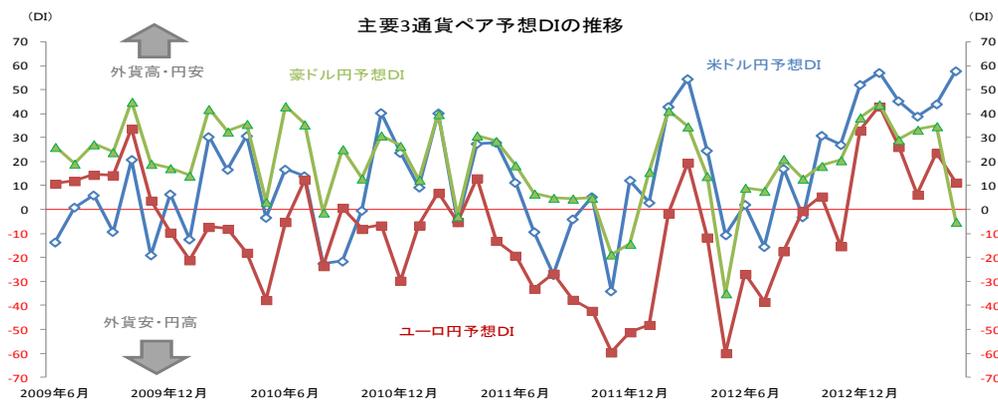
はじめに

当研究所が月に一度公表する「外為短観」では、各通貨ペアの見通しについてのアンケートに「外貨高・円安」と答えた投資家の割合から「円高・外貨安」と答えた割合を引いた数字を「予想DI」として発表している。「予想DI」は±0を各通貨ペアに対する強気・弱気の分岐点としてFX投資家の相場観を指数化したものである(プラス幅が大きいほど強気度合いが高く、マイナス幅が大きいほど弱気度合いが高いと考えられる)。今号では、この中から豪ドル/円予想DIを取り上げてみたい。

豪ドル/円予想DIは1年ぶりのマイナス

最新の第48回「外為短観」では、ドル/円やユーロ/円の予想DIがプラスとなったにもかかわらず、豪ドル/円だけが-5.0%ポイントと、前月の+34.9%ポイントから一気に一年ぶりのマイナスに

落ち込んだ。もちろん、豪ドル/円予想DIがマイナスを記録するのは初めてという訳ではなく、2009年6月の調査開始以来5度の例があり、今回が6回目である。突き詰めれば上昇か下落か横ばいかの3つの選択肢しかない相場予想で48回中、下落予想が6回しかないというのは、豪ドル/円がFX投資家に絶大な人気を博していた事の証左であろう。なお、48回の調査のうち、ドル/円は16回、ユーロ/円は30回のマイナスDIを記録している。さらに、過去に豪ドル/円予想DIがマイナスを記録したのは、ユーロ圏債務問題の混迷度合いが深まった2011年11月-12月(第30回と第31回調査)や、米国株が大きく下落した2012年5月(第36回調査)などであり、いわば「外部要因」による豪ドル弱気予想であったと考えられる。当然、豪ドル/円予想DIがマイナスを記録した回の調査ではドル/円やユーロ/円の予想DIもマイナスである事がほとんど(第31回調査だけはユーロ/円は



本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2013 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

マイナスであったが、ドル/円は小幅プラスであった)であり、主要3通貨ペアのうち、豪ドル/円予想DIだけがマイナスとなるのは初めての現象だ。今回の調査が5月14日～21日と、日経平均が突如として値崩れを起こした「5・23ショック」よりも前に行われたものである事から、株価の下落が豪ドル弱気予想につながったとも思えない。

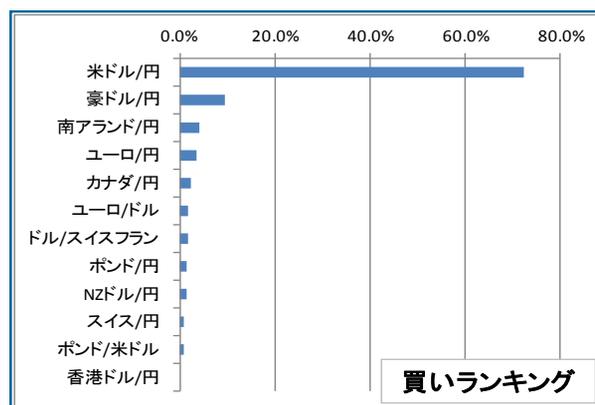
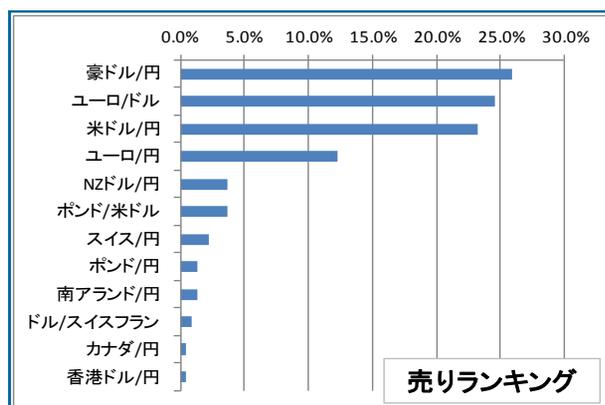
豪ドル/円が「売り」で注目のトップに

また、最新の第48回「外為短観」では、アンケート調査の定例質問項目である「今後注目している通貨ペアは？」の問いに対して、25.9%の回答割合を集めて「売り」で注目している通貨ペアのトップに豪ドル/円が選ばれた。これは調査開始以来初めての事であり、その回答割合も2012年10月に行った第41回調査の13.9%を大きく上回って過去最高となった。さらに、今回は「買い」で注目の通貨ペアに対する豪ドル/円への回答割合も9.5%と過去最低を記録した。2010年10月の第16回調査では48.1%ものFX投資家が「買い」で注目

していた事を考えると、豪ドル人気の凋落ぶりに驚かされるが、これほど急激かつ鮮明にFX投資家が豪ドル弱気に転じた背景には何があるのか大いに気になるところだ。

豪ドル/円弱気転換の背景は？

豪準備銀行(RBA)が5月7日に政策金利であるキャッシュレートを過去最低となる2.75%に引下げた上に、追加利下げに含みを残す声明を発表した事がFX投資家の豪ドル先安感を高めたとの見方も出来なくはないが、RBAがキャッシュレートを3.5%から3.25%に引下げた2012年10月や、3.0%に引下げた同年12月は、利下げ直後の調査にもかかわらず予想DIはそれぞれ+18.3%ポイント(第41回)、+38.5%ポイント(第43回)であった。この点を見ても、RBAによる利下げが豪ドル弱気予想の主因とは考えにくい。FX投資家にとって豪ドル買い・円売りの取引を行う際の魅力のひとつはスワップポイントの高さであり、利下げによってこの魅力が低下すると見れば、買い



本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2013 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

意欲が減退する事はあり得るだろう。しかし、豪ドル売り・円買いのポジションを持てば、ドル/円やユーロ/円を売り持ちにした場合よりも多額のスワップポイントを支払う必要がある以上、売り意欲を高める材料にはなりにくい筈である。それでも、今回の調査で豪ドル弱気予想が、強気予想を上回り、豪ドル/円が「売り」で注目のナンバーワンに選ばれたのは、買い持ちにしていたFX投資家の利益確定意欲の表れである可能性が高い。豪ドル/円予想DIが11か月間もの間、プラスを維持していたという事は、それだけ買い持ちポジションが積み上がっていたと考えられる(実際に、調査期間内における外為どっとコム顧客の豪ドル/円買い持ち残高は、年初と比較して約65%増加していた)。こうした中、豪ドル/円相場は4月11日に105.39円という2007年11月以来の高値を付けた後は、概ね100-102円台に高度を下げてみ合いとなっていた。こうした上値の重さを見せられたFX投資家が利益確定に動きたい欲求に駆られたとしても不思議ではないだろう。5月に入り、RBA

の利下げや、中国景気の減速懸念、また、米国景気の回復期待からドル高・円安が進んだ裏側でドル高・豪ドル安が進んだ事が、FX投資家の利益確定意欲を刺激した事は想像に難くない。

予想は見事的中したが・・・

豪ドル/円相場は6月13日に88.94円まで大きく下落しており、過去1ヵ月の下落率は12%を超えている。5月調査(第48回)時点でのFX投資家の予想が見事的中した形となった。ところが、この間の各種データからは、FX投資家が積極的に豪ドル売り・円買いを進めた様子は覗えない。外為どっとコム顧客の買い持ちポジションは5月調査以降の1ヵ月間でわずか8.6%しか減少していない上に、売り持ちポジションは50%近く減少している。また、社団法人金融先物取引業協会が発表した店頭FX市場における豪5月のドル/円売買高は18.7兆円余りと前月比で26.9%も減少しており、豪ドル売り活発化の痕跡は認められなかった。つまり、豪ドル/円相場が、5月後半に急落



本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2013 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

し、その後下げ足を速める中で、FX投資家は利益確定のタイミングを失ってしまったと考えられ、今年に入って構築された買い持ちポジションは今でもキープされている可能性が高いという事になる。

今後の豪ドル/円相場への影響は？

6月17日正午現在、豪ドル/円は90.80円台で推移しており、これは、今年の始値90.13円をわずかに上回る水準である。つまり、年明け以降に構築された買い持ちポジションの多くが含み損を抱える状況であり(スワップポイントは考慮せず)、大まかに考えて、年明け以降の週足終値の平均値である26週移動平均の96.89円前後が多くのFX投資家にとっての損益分岐点であると推測される。豪ドル/円相場が100円に近付けば、100-102円台で利益確定のタイミングを逃したFX投資家からかなりのボリュームで戻り売りが出ると考えられる。仮に、今月19日の米連邦公開市場委員会(FOMC)後に、市場のセンチメントが好転しても当面は豪ドル/円の上値は重くなりそうだ。

それ以上に懸念されるのは、市場のムードが一段とリスク回避に傾いた場合であろう。豪ドル/円の取引を好むFX投資家には中長期派が多く、高レバレッジの取引も多くない事から、ストップロスの損切りに対しては比較的懐が深い

と見られる(6月13日に88円台へ下落した際もそれほど多額のストップ売り注文は発動されなかった)。しかし、懐が深い故に、ひとたび発動されれば、想像以上の破壊力を示す事になりかねない。もし今後、損益分岐と推測される水準からの10%押しにあたる87.00円前後や心理的節目である85.00円を割り込むようだと、含み損に耐え切れず、ストップロスの損切り注文が発動される可能性は否定できないだろう。(了)

本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2013 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com